

# 謹賀新年

## 埼玉版 四季報

2023. 1. 1  
新春号

発行/NPO 法人  
埼玉県日本中国友好協会  
〒330-0835  
さいたま市大宮区北袋町 1-285  
てらこやラボ新都心3号室



### 富士見日中五〇年の歩みとこれから

富士見市日中友好協会

会長 岩本 喜直

私自身の中国との国交正常化五十年を振り返ると、日中間の海底通信ケーブルの建設を思い起こします。このケーブルは国交正常化後の政府間協議の元に、最初の日中の共同事業として計画・建設されたのです。現KDDIの前身である国際電信電話株式会社（KDD）において、このケーブルの建設に一技術者として携わりました。大変な事業でしたが、国交正常化四年後の一九七六年にケーブルは開通しました。中国側は

日本を経由して世界との通信が可能になりました。中国側のケーブル陸揚げ局にも滞在し、中国の多くの技術者と喜び合った記憶があります。中国の文化大革命の最中でした。日本では田中ロッキード事件が起きていた頃です。

さて話は変わって富士見日中は、友好協会として発足したのが一九八六年一月でした。来賓として中国大使館や埼玉県日中友好協会、県内各市の協会の方々に多数お招きして設立総会が開催されています。実は国交正常化からこの設立までの十数年間は協会設立の助走期間で、数次にわたる友好訪問を始め地域で友好事業を進めていました。そう考えると富士見日中として既に日中友好五十年を歩んできたこととなります。

協会設立後は中国への友好訪問や、中国、とりわけ埼玉県と友好協定を結んだ山西省の各市からの幹部の富士見市への訪問者の受入れや、須藤弘子元会長が亡くなられた時の偲ぶ会に山西省から音楽団員が来日して演奏会を催してくれたこともありました。

富士見日中の五十年の活動を振り返れば、中国における事業として、山西省の地方の失学児童への「里子・里親事業」、希望小学校の建設、寄進と児童の作品交流事業、緑化事業への参加など参加人数、規模、期間においても非常に大きな事業でした。また国内での地域の地域での事業活動として中国語教室、篆刻・太極拳・料理教室などの教室運営、中国映画鑑賞会など毎年実施、地域住民間の交流事業にも努めて来ました。

協会機関紙「こんにちは你好」と友の会機関紙「上陽（しやんやん）」を毎年発行し、また、協会ホームページを開き、毎月新しい記事を掲載し、常に新鮮な情報の発信に努めて来ました。ここでは協会の大きな事業の一つである「富士見・上陽希望小学校」のことを少しだけ紹介します。

この学校は富士見日中が中国山西省忻州市五台县上陽村に建設・寄進した学校です。一九九七年七月に建設を決議し、寄付金やチャリティコンサートなどで建設資金を得、一九九九年六月に開校しました。同時期に開校した富士見市立ふじみ野小学校との間で作品交流を通じ、国際理解教育が休むことなく二十有余年に渡り続いてきました。

二〇一九年には上陽希望小学校に児童と教師を始め山西省や市、県、鎮の関係者や地元住民が集い、富士見市からの訪中団約二十名も加わって、開校二十周年記念式典が開催されました。しかし他の希望小学校と同様、二〇二一年に閉校となりました。要因は様々あ

国交正常化の原点にたち日中関係を考える

第6回チャイナサロンの開催

ろうかと思われませんが、二十有余年にわたり地域の教育施設として貢献したことは大いに是とします。同時に時代の流れを感じます。

今年に入り、山西省の支援と富士見市の教育関係者の熱意により、上陽村の児童が在籍する豆村小学校との間で作品交流が新たな形でスタートしました。次世代を担う両国の子供たちの国際理解・友好・発展を願っています。

戦後七十七年、世界は不安定化の流れが強まっています。地球温暖化による異常気象とそれによる自然災害の世界における多発化、国家間の覇権や勢力競争、侵略行為の勃発、分断、分裂の現実化、どれをとっても平和を崩す切実な問題です。あらためて友好の根本に立ちかえり、平和の世界を築く努力が必要だと思えます。富士見日中として何ができるか大きな課題ですが、基本は、一步一步、草の根の民間友好の推進です。

富士見市日中は二〇一八年、中国の思い出話や経験談を午後のひととき気軽に楽しくお茶を飲みながら懇談をと、チャイナサロンをスタートしました。

第一回目は二月二三日、当協会岩本喜直会長の「四十数年前の日中国交回復期の通信と今、今後」という話題で、当時の政治・経済の事情を折り込んだ日中間の通信事情と海底ケーブル敷設にまつわるお話でした。海底ケーブルってどんなもの？敷設はどのようにするの？等々の苦労話も話されました。

二回目は同年五月二三日、当協会の呉少清理事に「私が見た日本と中国、二十年前そして二十年後」と題してお話を伺いました。在日二十年の呉理事は、来日したばかりの頃の故郷の現実や日本という新しい環境で

感じたこと、二十年後の現在、感じていることや故郷の変化等についてお聞きしました。現在、政治的に難しい日中関係ですが、だからこそ草の根の視点から両国の相互理解と友好を深める必要ではないでしょうかと呼びかけました。

三回目は同年一月一日で、理事(当時)の私、田口和平の「私と中国」でした。一九八〇年代から仕事の出張も含め約七十回中国を訪問しており、今日までの中国の様子とその変化をつぶさに伝えました。

四回目は翌二〇一九年六月二日。話者の山口文博さんは当協会の理事で、また大手自動車メーカーの現職エンジニアでもあります。「エンジンニアが見た中国の最新事情」と題して今日の中国を分析。今や世界第二の経済大国でハイテク技術

でも世界の最先端を走り、AI研究では揺るぎない地位を占めているそうです。五回目は同年一〇月十四日。当協会理事の侯紅葉さんが用意したテーマは「宦官システムの出現から長期的存在までの中国の理解」です。四千年の歴史を持つ宦官制度が理解できると現代中国の政治が見えてくるというものでした。なぜ日本には宦官システムや纏足・科擧の制度が入ってこなかったかを皆で話し合いました。

新型コロナウイルスの影響で三年ぶりの開催となった六回目は今年の九月二五日埼玉県日中友好協会橋本清一理事長を話者にお招きしました。橋本理事長は五十年間の国交を顧みて良かったことを思い出し、民を以って官を促す時代を継続しつつ両国が共にウィン・ウィンの関係を築けるよう努力していることと訴えました。途中、日中国交正常化五十周年のオンライン講演会を視聴。中

国側は汪婉先生(北京大学国際戦略研究院理事、前大使程永華氏夫人)、日本側は久保孝雄氏(元神奈川県副知事)がそれぞれの立場から講演されました。いずれも日中国交正常化時の共同宣言の「原点」にたち返ることがいま最も重要なことであると述べられました。

(文責)

富士見市日中友好協会会計

田口和平



富士見・上陽希望小学校との二十二年間に及ぶ

交流についての考察(要約)

それは突然の知らせだった。翌年の年賀状交流の準備を始めようとしていた矢先の二〇二一年九月二日、「校長は昨日の新年度から他の学校に勤務している。学校は閉まった。」という一通のメールが届いた。一九九九年の開校から二十二年目にして、富士見・上陽希望小学校のあつけない幕切れだった。

もつともそのメールを受け取ったとき、突然ではあったが唐突という印象は受けなかった。なぜなら、上陽村を訪れるたびに「そう遠くない日に“その日”はやってくるかもしれない」と予感させる状況の変化をずっと見続けてきたからだ。年々減少する在校生、村民の高齢化など、それはどこの農村にも共通する状況であったのだが…。

以下、「市協会」というのがこの富士見・上陽希望小学校を建設したのは、先行した埼玉県日中友好協会（以下、「県協会」という。）に刺激を受けてのことだ。

県協会がこのプロジェクトに関わった経緯は、富士見・上陽希望小学校開校十周年記念誌「友好交流、相互理解」そして「平和」（二〇一〇年二月二十八日発行）中の県協会・菊地正泰副理事長（当時）の「中国『希望工程』への協力」に詳しい。

市協会は、県協会の取り組みが一段落した一九九七年夏、独自の希望工程小学校建設と学費支援の募金活動の開始を理事会において決定し、翌年一月にはチャリティコンサートを開催。

これを機に会員が募金集めに奔走し、取り組みはいよいよ本格化したのであった。

一方、山西省側の窓口で



ある山西省人民対外友好協会（以下、「対友協」という。）も市協会の希望を正面から受け止めて対応した。とりわけ建設候補地の選定については様々な角度から慎重に検討、協議がなされた。管存恕秘書長と劉晋凌副秘書長（いずれも当時）は数か所の候補地に足を運び、慎重に選考を進めてくれた。その結果、省都である太原市から北東に約二百キロメートルの位置にある上陽村が建設地に決まった。かくして一九九九年六月一日の児童節の日に、中日友好富士見・上陽希望小学

（以下、「上陽小学校」という。）の開校式は盛大に開催された。この開校式には市協会から市川宏治団長をはじめとする二十三名の会員及び市民からなる訪問団が参加した。上陽村は胡軍偉村長を筆頭に老若男女村民総出で訪問団を迎え入れ、満面の笑みで感謝の気持ちを表した。

帰国後結成した富士見・上陽希望小学校友の会（以下、「友の会」という。）は市協会と連携して、様々な事業活動を行ってきた。「ハコができただけ」の上陽小学校は暖房や水道、机やいすなどの施設、設備、備品、教材など不足しているものばかりだった。教室の掛け時計、地球儀や辞典、運動用具、そしてノートや鉛筆などの学用品や日本の菓子類は訪問の都度持参をし、学生や見学の村人に配ってきた。訪問は十八回のべ八百十六人が参加。訪問時には日本文化の紹介にも力を入れた。学生・児童間の交流は、

習字作品、絵、年賀状などの手作り作品を交換して進めた。この交流事業には、友好姉妹校のふじみ野小学校からはのべ二千人、上陽小学校ではのべ五百一人が参加した。交換された作品はふじみ野小学校からは二千七十九点、上陽小学校からは千五百五十九点に上る。

このような交流の状況を、市民に知ってもらうため、発表活動も旺盛に取り組んだ。その回数は九十回を数える。市協会や友の会の会員向けの広報活動、学習会や講演会、中国映画会といった会員交流事業にも力を入れてきた。

すべてを網羅して示すことは困難であるが、いま振り返ると実に多彩な事業を展開してきたものだと思う。「希望工程」プロジェクトにより、県協会を含む県内各地の友好団体や個人によって山西省に建設された希望小学校は、一九九六年以降十校に上る。そのうち十年以内に七校が閉校した。

やむを得ないことではあるが、寄贈した当事者からは残念な結果と言えなくもない。一方、子どもたちがよりよい環境のもとで教育を受けられることができるようになったとすればそれは評価できる。いずれにしても教育に対する評価は歴史の中で、学生を中心に据えて検証されることだろう。

残りの三校のうち、静楽坂戸友好希望小学校は二〇一七年九月に、上陽小学校は二〇二二年八月にそれぞれ閉校となった。唯一残っているのは五寨県新寨联校で、一九九八年九月以来二十四年の歴史を刻んでいる。こうして農村に建てられた希望小学校は、大きな歴史のうねりの中で山西省においては姿を消しつつある。

ではこれら三校はなぜそれほど長期にわたって存続できたのだろうか。各々の条件は異なるので単純比較はできないが、参考までに、ここを上陽小学校におけるいくつかの要因と思わ



れる事項を列挙しておく。

- 一、富士見市教育委員会の深い理解と友好姉妹校であるふじみ野小学校の熱意
- 二、太原で窓口となってくれる協力者の存在
- 三、忻州市、五台県の行政関係者及び教育関係者の理解と協力
- 四、市協会と友の会の連携

これらの要因は決して偶然に生じたものではない。これまでの交流の意義を臆気ながらも意識し、深く考え、いろいろとアイデア

を練り、計画的に実践してきたこと、ここにその必然性を見出すことができる。

何よりも交流の意義は多くの方から気づきを与えていただいたからこそ、必然性を確信できる。吉林大学哲学社会学院の李全鵬先生は、富士見・上陽希望小学校開校二十周年記念誌「友好交流、相互理解」そして「平和」(二〇二〇年八月一二日発行)に特別寄稿された一文でこう述べている。

「遠い他者が一種の資源として機能し、常に異なる文化や知識を提供し、刺激してくれる。これによって、自分、または所属する社会ないし国、いまの現状、そしてこれからの道は、果たしてオルタナティブがないだろうか」と、政府や企業、あるいは科学界が主張する『真理』への省察力が涵養されることにつながる。」

上陽小学校が閉校となり交流の相手がいなくなった

ことは誠に残念なことであった。が、二〇二二年春、上陽村の子どもが多く通学する豆村鎮の豆村小学校との交流が新たに始まった。まさに、先の要因に登場する各方面の方々の連係プレイが実った瞬間であった。

二十年を超える取り組みを経て、やり残したことや反省は数限りない。一つひとつ課題を整理して、新たな交流の中で新たな歩みを始めたい。

### 芋ほり交流会 三年ぶりに開催

本稿の執筆にあたり、山西省人民対外友好協会の張鑫さんには業務多忙のなか、豆村小学との交流開始の手配、希望小学校の現状について調査及び情報提供をいただいた。あらためて謝意を表したい。

(文責)

富士見市日中友好協会理事  
前富士見・上陽壺里小学校  
友の会秘書長 紫関伸一



まさに芋ほり日和となつた一〇月二三日(日)、恒例の芋ほり交流会が三年ぶりに開催されました。富士見市に隣接する三芳町は川越芋の名産地。「はやし園」には朝から続々と観光客が集まってきました。富士見市日中の一団も手続きを済ませて、いざ芋畑へ。短い時間でしたが、ビニール袋一杯の“成果”に、皆さん満足の様子でした。